

## 『アメリカン・スパイナード』

2015年03月24日

テレビで『アメリカン・スパイナード』という映画が評判になっているという宣伝を見た。本屋で、原作本を見つけたので、読んでみた。私には「狂気」の世界以外の何ものでもなかった。クリス・カイルの同名の自伝は米国で大ベストセラーになり、クリント・イーストウッド監督が映画化し、歴史的な大ヒットをしている。映画監督のマイケル・ムーアは「狙撃手は卑怯者だ」と評したという。私は、映画を観る気はしない。

カイルはテキサス州で生まれ、南部のカウボーイを憧れる普通の青年として成長する。彼は Navy SEALs (海軍特殊部隊) というエリート兵士を目指す。SEAL の訓練は凄まじく、9割が脱落する。訓練に耐え SEAL になり、更にスパイナード (狙撃手) になる訓練を受ける。それも半数が脱落するという。殺人マシンになるように鍛えられる訳である。

カイルは4回、イラクに派兵され、160名を射殺する。これは、公式にカウントされた数で、非公式を加えれば250名を超し、狙撃の最高記録を持つ。戦友からは「レジェンド (伝説)」と言われ、イラク軍や武装勢力からは「悪魔」と言われるほどの狙撃手になった。彼にとって、戦友は「いい奴」で、正義を守る者たちである。サダム・フセインやテロリストの親玉であるザルカーウィー派は「悪い奴」である。味方を守るためには身を挺し、傷ついた者を労わり、戦死者には涙を流す。反面「悪い奴」とする人間を容赦なく、一片の曇りなく非情に射殺する。戦争は味方と敵を単純化し、二分法で峻別する。

「一人殺せば犯罪者であるが、百万人殺せば英雄になる」と言われるように、カイルは多くの勲章を受け、英雄扱いされる。米国の価値観がこのような若者を生み出した訳である。それを讃えるところにはイラク戦争の本質は見えてこないのではないか。

彼は帰国後、心を病み苦しむ。そして、PTSD (心的外傷後ストレス障害) を患う元海兵隊員によって射殺され、39歳の若さで命を落とす。カイルは「神、国、家族」の順に価値を置くそうである。信仰熱心な家族に育てられ、教会に通っていた。彼の信じた神はどのような神であったのだろうか。おそらく、十字架で自分の命を献げた主イエスではあるまい。国は、大量破壊兵器を所持するイラクは危険であるとし、先制攻撃を正当化した米国である。彼は、国の政策をそのまま信じ、正義の戦いとしたのである。しかし実際には、大量破壊兵器はなく、フセイン政権打倒後は民主化どころか、混迷を深めるだけで、米国は撤退せざるを得なかった。彼は、愛する妻を得、二人の子どもが与えられている。戦時休暇の帰国時は、家族を愛している。戦争は、自分が殺害した者にも愛する家族がいることを「忘却」させる。『アメリカン・スパイナード』を英雄物語にしてはならない。殺人マシンに仕立て上げられたカイルは誤った国策によって殺されたのである。一人の若者の一生を台無しにした悲劇として、罪責として捉えるべきであろう。

米国のウイルソン大統領は、各民族集団が自らの意志に基づいて、その帰属や政治組織、政治的運命を決定し、他民族や他国家の干渉を認めないとする民族自決権を提唱し、60年代に国連で認められた。様々な不備もあったが、現在考え直すべき「権利」ではないか。アフガニスタンは平穏で豊かな国であったが、ソ連の侵攻以降、紛争の絶えない国家になってしまった。イラク、シリアも米国と有志連合国の軍事侵攻によって、收拾がつかない状態になっている。大国がテロ防止という名目で干渉することによって、テロを世界中に蔓延させているのが実情ではないか。『アメリカン・スパイナード』は、武力干渉は悲劇を生む有害なものであることを教えている。独裁政権で被害を受けている人々には、人道支援で応じていけば十分である。